

エドガー・アラン・ポー『短章集』翻訳プロジェクト序説

平野幸彦

1. 『短章』とは何か

詩人、小説家、評論家とさまざまな顔を持つエドガー・アラン・ポー（1809-49）の肩書きをあえてひとことで括ろうとするならば「マガジニスト (magazinst)」こそふさわしい。マガジニストとはもっぱら雑誌や新聞を発表媒体にしてものを書き、その編集や出版にも関与する文筆家の謂である。ポーの名をアメリカ文学史上不朽ならしめている数々の短篇小説や「大鴉」“The Raven”をはじめとする後期詩篇は、そのほとんどが新聞雑誌を初出の場としているし、単行本のかたちで初めて世に出た初期の詩作も、大半がのちに——多少の手を加えられて——定期刊行物に再録されている。また彼は、プロの物書きとしてのキャリアのかなりの部分を——正式な地位はともかく——新聞雑誌の編集者として費やしている。⁽¹⁾

そしてそのような彼の文人としての性格を、ある意味もっともよく反映している作品と言えるのが、バートン・R・ポーリンがポーの未刊の著書の仮題にちなんで『短章』(Brevities) と総称している一群のテキストだろう。具体的には、「ピナキディア」“Pinakidia” (1836)、「文芸雑話」“Literary Small Talk” (1839)、「マージナリア」“Marginalia” (1844-46, 48-49)、「一章の提言」“A Chapter of Suggestions” (1845)、「50の提言」“Fifty Suggestions” (1849)、およびこれらの作品と関わりのある諸篇がそれに当たる。⁽²⁾

『短章』は長短取り混ぜた——1センテンスだけのものあれば数パラグラフに及ぶものもある——学術的なエッセイで、総計数百篇にのぼる。テーマは必ずしも文学にかぎらない。哲学や宗教といった隣接領域はもちろんのこと、社会科学や自然科学にも取材している。また取り上げられている人物や事例も古典古代から現代——つまり19世紀前半——までと、きわめて広範にわたっている。

2. 『短章』の執筆目的

いったい何のためにポーはこうした作品をものしたのだろうか。純粹に知識や思想を伝達するため——それと金を稼ぐため——であったのはもちろんだが、ほかにも目的はあったように思われる。

ひとつは、アーサー・ホブソン・クイン (250) ほか多くの論者が指摘しているように、「埋め草 (fillers)」としての役割である。このことは、たとえば「ピナキディア補遺」“Supplementary Pinakidia”⁽³⁾の前半部 (SP 1-28) が掲載された『サザン・リテラリー・メッセンジャー』の誌面 (図1) を一瞥すれば容易に察せられるだろう。また、『ブロードウェー・ジャーナル』の「編集雑録」もこれに該当するはずだ。これらの定期刊行物の編

は乏しいと言わざるを得ない『短章』について、これまでいかなる研究がなされてきただろうか。管見によれば、せいぜい出典探しの域にとどまっているようだ（そしてその方面においては、すでに十分な成果が上がっている）。あるいは、ポーの創作作品や彼の思想を論ずるさいに、傍証として引き合いに出される程度であろう。要するに、『短章』それ自体を直接の対象とし、その意味を考察するような研究はほとんど行なわれていないのが現状だ。

そもそも『短章』のテキストからして、なかなか満足のいくかたちで後世の一般読者の手に入らなかったのである。『短章』がその一部にせよ、初めて本にまとめられたのは、ポーの悪名高い遺著管理者ルーファス・ウィルモット・グリズウォルド Rufus Wilmot Griswold (1815-57) が編集したポー作品集 (*The Works of the Late Edgar Allan Poe* —— 以下、出版者名にちなんでレッドフィールド版と記す) で、その第3巻 (1850) に「詩の原理」“The Poetic Principle”, 「ニューヨークの文人たち」, 37篇の書評記事と合わせて、「マージナリア」と「50の提言」が収められている。しかしながら「マージナリア」について言えば、17回の連載で発表された291篇のうち、(おそらくポーの指示により) 90篇が割愛、新たに25篇が追加され、合計226篇となっている。⁽⁵⁾その後イングラム (1875) やウッドベリーら (1895) による未収作の発見がなされたが完全には至らず、20世紀に入って長らく定本とされてきたハリソン編全集 (James Albert Harrison [ed.], *The Complete Works of Edgar Allan Poe* [New York: Thomas Y. Crowell, 1902] —— いわゆるヴァージニア版) にしても、その名と裏腹に遺漏を免れなかった。⁽⁶⁾

『短章』の全容が —— 「ピナキディア補遺」と「マージナリア補遺」を除き —— ほぼ一望できるようになったのは、G・R・トンプソンの編集によるライブラリー・オヴ・アメリカ版 (G. R. Thompson [ed.], *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews* [New York: Literary Classics of the United States, 1984]) の刊行によってであろう。だがこの作品集にも大きな弱点があった。シリーズを通じての編集方針により、注がほんのわずかししか付いていなかったのである。ところがその翌年、あたかもその弱点を補うかのように詳注付きのテキストが、すでに何度もその名に言及しているバートン・R・ポーリンの編集により出版された。もっともこの本にしても完全無欠との評価を獲得するには至らなかったが。⁽⁷⁾それでも現時点では、上記トンプソン版を参照しながら使用するかぎり、もっとも頼りにしてよいテキストと言えるだろう。

4. 『短章』の意義

上述したように新聞雑誌の「埋め草」的な性格が強く、しかも又聞きの情報に多くを依存している『短章』であるが、これをいまあらためて研究することに、いったいどのような意義があるのだろうか。

ひとつにはもちろん、先にも触れたように、ポーその人の思想の解明や、彼の手になる創作作品 —— 詩や小説 —— のより深い理解に資するということが挙げられよう。借り物の意見がかなりの部分を占めていることは、このさい問題にならない。なぜなら彼はそれを是認し、自説としたのだから (出所を明示していない場合はなおさらのことだ)。

しかしここでは、より広い文脈における意義を強調したい。それは19世紀前半のアメリカにおける文芸文化のありようを解明するための手がかりとしての意義である。自ら掲載

誌の編集に携わっていた——ということは「埋め草」としての役割が大きかったとおぼしき——「ピナキディア」と「編集雑録」はさておき、『短章』が雑誌に載せてもらえたということは要するに「売れた」ということであり、それはこうした記事が購読者に好評をもって受け入れられたということの意味する。すなわち、個々の話題についての意見や判断は、あくまでもポー（あるいはポーというフィルターを通した、おもに18、19世紀の文人たち）のものだったとしても——つまり、必ずしもすべての読者が同意していたとはかぎらないとしても——、それらの話題自体は、十分読者全般の関心に訴えるものだったということだ。ならば、『短章』を体系的に分析・考察することにより、19世紀前半アメリカの、文芸誌を購読するような一般大衆の興味のあり方や共有知の一端をうかがうことができるのではないか。さらに、ポーの情報源——ありていに言えば「ネタ本」——の多くが外国のものだったことを思うと、文芸文化における米英もしくは米欧間の影響関係を探る一助となることも期待できよう。

かくして、ポーの『短章』を日本語に翻訳し、わが国の読書人に紹介することには相応の意義があると考えられるのである。⁽⁸⁾

5. 『短章』の邦訳状況

『短章』の邦訳は、筆者が調べたかぎり、吉田健一訳の「マージナリア」（彼は「覚書（マルジナリア）」と表記している）だけしか存在しない。吉田訳の底本は——時代的に致し方ないことかもしれないが——網羅性およびテキスト校訂の点で難を免れないイングラム編作品集 (John Henry Ingram [ed.], *The Works of Edgar Allan Poe* [Edinburgh: Black, 1874-75]) 第3巻 (*Poems and Essays, Including Eureka, Marginalia, etc. etc.*) およびステッドマン・ウッドベリー編作品集 (Edmund Clarence Stedman and George Edward Woodberry [eds.], *The Works of Edgar Allan Poe* [Chicago: Stone and Kimball, 1894-95]) 第7巻 (*Literary Criticism 2*) とのことである。しかも彼は「訳しても余り面白くないようなものは省略した」と述べている (708)。たしかに、前出ポーリンは「マージナリア」の数を316篇 (M: 291 + SM: 25) としているが、吉田が訳出しているのはそのうちの123ないし124篇、つまり全体の4割ほどでしかない (表1を参照)。さらに読者に不満をいだかせるのは、最低限の注しか付いていないことである (もっともこれも、仕事になされた時代を考えればやむを得ないのかもしれないが)。『短章』はやはり、それが書かれた当時の状況や通念を踏まえなければ理解不能、あるいは正当に評価することはできないと思うのだ。

作品の取捨選択において発揮された目利きぶりも含め、大いに参考になる吉田訳だが、やはりこれだけでは、ポーの『短章』の紹介としては不十分の感を否めない。筆者がこのたび、『短章集』翻訳プロジェクトを企画したゆえんである。⁽⁹⁾

注

- (1) ポーが編集に関与した定期刊行物およびその期間は以下のとおり——『サザン・リテラリー・メッセンジャー』*The Southern Literary Messenger* (1835-37), 『パートンズ・ジェントルマンズ・マガジン』*Burton's Gentleman's Magazine* (1839-40), 『グレアムズ・マガジン』*Graham's Magazine* (1841-42), 『イヴニング・ミラー』*Evening Mirror* (1844-45), 『ブロードウェー・

ジャーナル』*The Broadway Journal* (1845)

- (2) あるいは『ブロードウェー・ジャーナル』に随時掲載された「編集雑録」“Editorial Miscellany”や、1846年の『ゴードイズ・レディーズ・ブック』*Godey's Lady's Book*に6回にわたって連載された「ニューヨークの文人たち」“The Literati of New York”なども、この範疇に含まれてしかるべきなのかもしれない。
- (3) ポーリンによる呼称。調子および構成の点で「ピナキディア」に非常に似ているとおぼしい一連の作品を指す（なお“SP”等の略号は、ポーリン版の参照用記号番号を示す）。
- (4) たとえば「ピナキディア」のかかなりの部分は、各種研究書やハンドブックからの孫引きであることがわかっている（Pollin xii-xiii, xxxiv-xxxv）。
- (5) これらレッドフィールド版において追加された25篇を、ポーリンは「マージナリア補遺」“Supplementary Marginalia”と呼んでいる。
- (6) 以上の経緯については、ポーリン版序論に詳しい（とくに xvii-xviii）。
- (7) たとえばケント・P・リュングクイストは、おもにテキスト校訂上の方針に疑義を呈している（44）。
- (8) もちろん『短章』のような文章はポーの専売特許ではない。製紙、印刷、流通における技術の進歩、および識字率の上昇により、19世紀前半のアメリカは新聞雑誌の黄金期にあった。だからこの手のテキストはほかにもたくさん生み出されたはずであり、それらを包括的に研究するに如くはないが、しかしこうした記事は、その性格上、歴史の闇に埋もれがちで、発掘されて校訂され、書物にまとめられることなど滅多にない。ほかならぬポーの作品だったからこそ——遅々として進まず、正確さや厳密さを欠きがちであったとはいえ——とにかく研究がなされ、一定の成果を上げてきたのである。
- (9) 本プロジェクトは、ポーリン版に収録されている全篇を——ポーリン版とは異なり——年代順に訳出する（表2を参照）。注については、主としてポーリン版に依拠することになるだろうが、なるべく裏を取るように心がけたい。またその他の資料からの情報もできるかぎり取り入れるつもりである（参考文献についてはその都度付載する予定）。

参考文献

- Rufus Wilmot Griswold (ed.), *The Literati: Some Honest Opinions about Autorial Merits and Demerits, with Occasional Words of Personality. Together with Marginalia, Suggestions, and Essays*. Vol. 3 of *The Works of the Late Edgar Allan Poe* (New York: J. S. Redfield, 1850) ——ただし本稿では The Edgar Allan Poe Society of Baltimore の Web 版 (<http://www.eapoe.org/works/editions/grvolIII.htm>) を参照した。
- Kent P. Ljungquist, “Poe.” *American Literary Scholarship: An Annual 1985*. Ed. J. Albert Robbins (Durham, NC: Duke UP, 1987) 43-56.
- Burton R. Pollin (ed.), *The Brevities: Pinakidia, Marginalia, Fifty Suggestions and Other Works*. Vol. 2 of *Collected Writings of Edgar Allan Poe* (New York: Gordian Press, 1985)
- Arthur Hobson Quinn, *Edgar Allan Poe: A Critical Biography* (New York: Appleton-Century-Crofts, 1941)
- Kenneth Silverman, *Edgar A. Poe: Mournful and Never-ending Remembrance* (New York: Harper Collins, 1991)
- 佐伯彰一ほか編『ポオ全集』第3巻（東京創元社，1970）

表1 吉田健一訳「覚書（マルジナリア）」対応表

邦題 ⁽¹⁾	『ボオ全集』第3巻頁数	ポーリン版参照用記号番号
「マルジナリア」	600-603	M Intro.
「悪口文」	603	M 163
「弗全盛」	604	M 228
「アメリカ」	604-605	M 184
「アメリカ文学の本国性」	605-607	SM 1
「類似」	607	SM 16
「絶滅」	608	M 126
「聯想」	608-609	M 284
「芸術の定義」	609	M 243
「芸術のからくり」	609	M 266
「芸術家」	610	M 164
「短文」	610-11	SM 15
「ブルワ」	611	M 77
「ブルワの『ボムベイの最後』」	612	M 49
「ブルワの『夜と朝』」	612	M 73
「小説家としてのブルワ」	612-13	SM 4
「頭文字」	614	M 236
「カーライル」	614	M 255
「カーライル」	614-15	M 289
「慈恵」	615	M 263
「コウルリッジ」	615	M 193
「コウルリッジの食卓談」	616	M 109
「議会」	617	M 227
「会話」	617-18	M 192
「卑怯」	618	M 185
「批評」	618-19	M 141
「批評、——アナクレオン」	619	M 244
「デフォー」	619-20	SM 21
「自己説明嗜好癖」	621	M 70
「Weeping-willow の語原」	621	M 47
「ディッケンスの『骨董屋』」	622-23	SM 14
「ディッケンスとブルワ」	623-24	SM 20
「劇」	624	M 131
「ギリシア劇」	625	M 186
「戯曲に於ける場面の変り」	626	M 120
「現今の雄弁」	626-27	M 112
「エマソン」	627-28	M 188
「表現」	628-30	M 150
「優越者の宿命」	630-31	M 247
「運」	631	M 121

「天才」	631-32	M 189
「天才」	632	M 190
「天才」	632-33	M 187
「天才と根気」	633-34	M 118
「制御された天才」	634-35	M 45
「ドイツ文学」	635-36	M 181
「神と靈魂」	637	M 199
「グラッタンの『大道小径』」	637-38	M 203
「バシル・ホール」	638	SM 8
「ヘーバ」	638	SM 23
「ヘーゲルと哲学」	639	M 245
「小説家達への注意」	639	M 268
「想像力」	639-40	M 220
「講演」	640-41	SM 22
「老練な論法家」	641-42	M 63
「ロングフェロー」	642	M 160 ⁽²⁾
「ロングフェローとタッソに於ける文学的モザイク」	643-44	M 138
「ロングフェローの『流浪の子』」	644-46	M 140
「ロングフェローの『流浪の子』」	647	M 134
「恋，——「少年詩人の恋」」	648-49	SM 12
「ロウエルの『談話集』」	650	M 122
「雑誌文学」	651	M 182
「雑誌」	652	M 143
「マリブラン」	652-53	M 85
「『催眠術の啓示』及び『ヴァルドマアル氏の病症の真相』」	653-56	M 200
「暗比」	656-57	M 149
「ミルの命題」	657	M 124
「群集」	657	M 226
「現代多神論」	657-58	M 53
「ムア」	658	SM 17
「棒杭を吞込んで居る道德家達」	658-59	M 56
「文学的倫理」	659	M 217
「モーゼの天地創造説」	660	M 55
「ヨナ書の独訳」	660	M 71
「本の濫造」	660-61	SM 6
「[天体の音楽]」	661	M 239
「ニイルの作品，——その構成の不完全」	661-62	M 216
「ニウンハムの『人間磁気』」	662-64	M 180
「北米新報」	664	M 211
「匂い，——連想」	665	M 48

「光学的手品」	665	M 54
「獨創性」	665-66	M 119
「獨創性」	666	SM 24
「過去, 現在」	667	M 231
「ポオルディングの『ワシントン伝』」	667-68	SM 13
「旋毛曲り」	669	M 233
「ペトラルカ」	669-70	SM 10
「哲学上の誤り」	670	M 254
「剽竊, ——文学の掬摸」	671-71	SM 11
「詩に於ける破格」	671-72	M 218
「ラハルプのラシーヌの批評」	672-73	M 50
「詩」	673	M 152
「詩とは何であるか」	673-74	M 179
「快樂禁止」	675	M 267
「句読点」	675-76	M 197
「此の論法」	677	M 87
「循環論法」	677-78	M 196
「改革, ——反対」	678	M 262
「宗教と哲学」	678	M 260
「自分の生涯を生返すこと」	679-80	M 51
「修辞学の規則」	680-81	M 195
「押韻」	681-84	M 147
「眞実」	684	M 250
「オーガステインの摩尼教論」 ⁽³⁾	685	M 59
「魂の在所」	685	M 285
「自然を超越すること」	685-86	M 229
「シュエの『パリの秘密』」	686-91	M 176
「スウェデンボルグ派の輕信」	691	M 130
「短篇」	692	M 273
「テニソン」	692-94	M 44
「思索」	694	M 277
「『私の心を発く』」	694-95	M 194
「『ウンディーネ』」	695-97	M 98 ⁽⁴⁾
「合衆国の標語」	697	M 127
「復讐」	697	M 252
「ヴォルテール著作集」	697-98	M 86
「故ジョン・ウィルソン」	698-99	SM 7
「天才」	699	M 238
「哲学体系」	700	M 242
「シェークスピア批評」	700-701	--- ⁽⁵⁾
「禁酒運動」	701-702	--- ⁽⁶⁾
「禁酒運動」	702	--- ⁽⁷⁾

「リイ・ハント」	702-703	--- ⁽⁸⁾
「批評」	704	M 23
「音楽」	704	M 8
「自然の状態」	705	M 10
「作品の転載」	705-706	--- ⁽⁹⁾
「事実と小説」	706	M 39
「学識」	706-707	M 27 ⁽¹⁰⁾

注

- (1) 吉田訳の底本に表題はない。
- (2) ただし一部のみ（底本を反映）。
- (3) 邦題は明らかに誤りで、直前の一篇に付された注（“St. Austin de libris Manichais.”）を混同したものと思われる。正しい注は“Mercier’s “L’an deux mille quatre cents quarante.””——「ヴォルテール著作集」を参照。
- (4) ただし最終パラグラフを欠いている（底本を反映）。
- (5) 書評記事“Wiley and Putnam’s Library of Choice Reading. No. XVII. The Characters of Shakspeare. By William Hazlitt.”（*The Broadway Journal*, August 16, 1845）の抜粋（第2, 3パラグラフ）。
- (6) 1850年版にもポーリン版にも含まれていない（出典未詳）。
- (7) 1850年版にもポーリン版にも含まれていない（出典未詳）。
- (8) 書評記事“Wiley & Putnam’s Library of Choice Reading. No. XX. The Indicator and Companion. By Leigh Hunt. Part II.”（*BJ*, August 30, 1845）。
- (9) “Editorial Miscellany”（*BJ*, August 30, 1845）の一部。
- (10) ただし最後の一文は次篇（M 28）のもの。

表2 *Brevities* 発表年代順リスト

表題	掲載誌 巻数, 頁数 (号)	ポーリン版参照用記号番号
“The Unities”	SLM I, 698 (August 1835)	SP 1
(no title)	SLM I, 699 (August 1835)	SP 2
(no title)	SLM I, 734 (September 1835)	SP 3
(no title)	SLM I, 740 (September 1835)	SP 4
“LOGIC”	SLM II, 16 (December 1835)	SP 5
“LE BRUN”	SLM II, 27 (December 1835)	SP 6
(no title)	SLM II, 96 (January 1836)	SP 7
“THE GOURD OF JONAH”	SLM II, 148 (February 1836)	SP 8
“THE ILIAD”	SLM II, 151 (February 1836)	SP 9
“MARTORELLI”	SLM II, 153 (February 1836)	SP 10
“NEW TESTAMENT”	SLM II, 154 (February 1836)	SP 11
“GIBBON AND FOX”	SLM II, 159 (February 1836)	SP 12
“STATIUS”	SLM II, 159 (February 1836)	SP 13
“BAI”	SLM II, 220 (March 1836)	SP 14

“AUTHORS”	SLM II, 259 (March 1836)	SP 15
(no title)	SLM II, 314 (April 1836)	SP 16
(no title)	SLM II, 340 (April 1836)	SP 16A
“THE CORPUS JURIS”	SLM II, 372 (May 1836)	SP 17
“ALLITERATION”	SLM II, 380 (May 1836)	SP 18
“OTTO VENIUS”	SLM II, 427 (June 1836)	SP 19
“PARADISE LOST”	SLM II, 500 (July 1836)	SP 20
(no title)	SLM II, 535 (August 1836)	SP 21
(no title)	SLM II, 557 (August 1836)	SP 22
(no title)	SLM II, 572 (August 1836)	SP 23
“PINAKIDIA”	SLM II, 573-82 (August 1836)	Pin. Intro. 1-172
(no title)	SLM II, 622 (September 1836)	SP 24
“NOM DE GUERRE”	SLM II, 676 (October 1836)	SP 25
“BIBLES”	SLM II, 676 (October 1836)	SP 26
“WALLADMOR”	SLM II, 773 (October 1836)	SP 27
(no title)	SLM II, 779 (November 1836)	SP 28
“LITERARY SMALL TALK”	AM II, 60-61 (January 1839)	LST 1-4
“LITERARY SMALL TALK”	AM II, 133-34 (February 1839)	LST 5-7
“MARGINALIA”	DR XV, 484-94 (November 1844)	M Intro. 1-43
“MARGINALIA”	DR XV, 580-94 (December 1844)	M 44-116
“A CHAPTER OF SUGGESTIONS”	Opal 1845, 164-70	CS 1-11
“MARGINAL NOTES.-NO. I”	GLB XXXI, 49-51 (August 1845)	M 117-134
“MARGINAL NOTES.-NO. II”	GLB XXXI, 120-23 (September 1845)	M 135-146
“MARGINALIA”	GM XXVIII, 116-18 (March 1846)	M 147-154
“MARGINALIA”	DR XVIII, 268-72 (April 1846)	M 155-169
“MARGINALIA”	DR XIX, 30-32 (July 1846)	M 170-175
“MARGINALIA”	GM XXIX, 245-48 (November 1846)	M 176-180
“MARGINALIA”	GM XXIX, 311-13 (December 1846)	M 181-188
“MARGINALIA”	GM XXXII, 23-24 (January 1848)	M 189-196
“MARGINALIA”	GM XXXII, 130-31 (February 1848)	M 197-199
“EXCERPTA”	SLM XIV, 96 (February 1848)	SP 29-34
“MARGINALIA”	GM XXXII, 178-79 (March 1848)	M 200
(no title)	SLM XIV, 228 (April 1848)	SP 35
(no title)	SLM XIV, 319 (May 1848)	SP 36
(no title)	SLM XIV, 376 (June 1848)	SP 37
“RANZ DES VACHES”	SLM XIV, 376 (June 1848)	SP 38
“EPIGRAM”	SLM XIV, 654 (November 1848)	SP 39
(no title)	SLM XIV, 671 (November 1848)	SP 40
(no title)	SLM XIV, 671 (November 1848)	SP 41
(no title)	SLM XIV, 698 (November 1848)	SP 42
(no title)	SLM XIV, 698 (November 1848)	SP 43
(no title)	SLM XIV, 726 (December 1848)	SP 44

(no title)	SLM XIV, 752 (December 1848)	SP 45
(no title)	SLM XIV, 760 (December 1848)	SP 46
“MARGINALIA”	SLM XV, 217-22 (April 1849)	M Intro. 201-212
“MARGINALIA”	SLM XV, 292-96 (May 1849)	M 213-222
“FIFTY SUGGESTIONS”	GM XXXIV, 317-19 (May 1849)	FS 1-25
“MARGINALIA”	SLM XV, 336-38 (June 1849)	M 223-256
“FIFTY SUGGESTIONS”	GM XXXIV, 363-64 (June 1849)	FS 25-50
“MARGINALIA”	SLM XV, 414-16 (July 1849)	M 257-289
“MARGINALIA”	SLM XV, 600-601 (September 1849)	M 290-291

掲載誌名の略号

SLM: *The Southern Literary Messenger*; AM: *The American Museum*; DR: *The United States Magazine and Democratic Review*; GLB: *Godey's Magazine and Lady's Book*; GM: *Graham's American Monthly Magazine of Literature and Art*; Opal: *The Opal*